



公開学術講演会

「参勤交代行列の構造」

根岸茂夫(國學院大學教授)

令和二年度の國學院大學研究開発推進機構公開学術講演会は、根岸茂夫氏(文学部教授、國學院大學校史・学術資産研究センター長)を講師に招き、「参勤交代行列の構造」と題して行われた。

した。

概要

講演は、『南部藩参勤交代図巻』(太田稔氏所蔵、岩手県立博物館保管)を文献資料と比較しながら読み解くことを通して、近世の武家社会の構造を考察するものであった。

この絵巻は、長さが約三十メートルであり、人物・六五〇人、馬・二十九疋、鎗・六十四本、鉄炮・三十八挺、弓・二十三張が描かれる。

はじめに

まず、根岸氏は、古文書・古記録などの文字史料だけでなく、絵図も重要な史料となる。この場合には、文字史料と比較しながら描かれたモノを解釈していく作業が必要であるとした。

そして、武家行列図には、参勤交代のような旅装の図と、藩邸から江戸城に出仕するときのような平時の図がある。武家社会の構造は、前者

國學院大學 研究開発推進機構 機構ニュース Vol.14 No.2 発行人 武田 秀章 編集人 大東 敬明 〒150-8440 東京都渋谷区東 4丁目10番28号 電話 (03) 5466-0104 FAX (03) 5466-9237

目次

公開学術講演会 「参勤交代行列の構造」(大東敬明) 1 日本文化研究所 「宗教文化オンラインワークショップ(インドネシア・タイ)」(平藤喜久子) 3 日本文化研究所 国際研究フォーラム 「見えないものたち日本人 The Japanese and the Realm of the Usenai」(星野靖) 4 研究開発推進センター 渋谷学シンポジウム「地域資源を活かした都市防災へ」(宮本善士・半田竜介) 5 國學院大學博物館 企画展「モノで読む古事記」(渡邊卓) 6 國學院大學博物館 企画展「栗石雑筆 神道考古学の祖 大場磐雄の記憶と記録」(内川隆志・深澤太郎) 7 國學院大學博物館 「オンラインミュージアム」(國學院大學博物館) 8 國學院大學博物館活動報告(國學院大學博物館) 9 資料紹介「茨城県鏡塚(目下ヶ塚)古墳出土品と大場磐雄資料」(深澤太郎) 12

がそれを示している。『南部藩参勤交代図巻』のような大名行列図に描かれたものを文字史料と比較しながら一つ一つ検討していくと、近世武家社会の構造が見えてくるのではないか」と述べた。

・南部藩の参勤交代

南部(盛岡)藩は戦国時代以来の大名で、南部氏が藩主であり、天正十八年(一五九〇)に南部盛直が豊臣氏より領地を安堵され、寛永十一年(一六三四)に十萬石と確定した。文化五年(一八〇八)には蝦夷地警備の功績により、二十萬石の格式となっていた。

同藩の参勤交代の行列は、近世中期には五百人〜六百人、後期には三百人程度であった。時期は参勤は三月、帰国は五月と定められていた。

盛岡から江戸までは百三十九里で、宿駅が九十一あり、この距離を十一泊十二日(十二日振り)で進んだ。ただし、雪が降る九月から二月の間は十三日振りになる。奥州街道の宿駅では、各宿に一日に馬二十五疋と人足二十五人を常備しておかなくてはいけなかったが、足りない場合には周辺の村々から馬や人足を動員したと説明した。

・参勤交代行列は武家の軍隊の行列

絵巻の冒頭、火縄銃が入った赤い袋を担いだ鉄砲隊が進み、その後ろから弾薬が入った玉箱、鎧が入った具足櫃、さらに馬に乗った鉄砲隊の隊長(御鉄砲先手役)が行く。御鉄砲先手役は、多くの人々を従えている。これについて根岸氏は、時代劇では馬に乗った武士が一騎で進んでいる。しかし、実際は馬の口を取る

口付、草履取、傘持、挟箱持、鎗持などの家来を従えており、それが当時の常識であったと述べた。

『南部藩参勤交代図巻』は鉄炮に続いて、弓、長柄(鎗)を描く。この順序は、敵が近づいた場合、鉄炮がまず撃ちはじめ、次いで矢が加わり、さらに敵が近づくと、長柄隊が突っ込み、戦闘がはじまったことに関連する。

参勤交代の行列は、戦国時代から江戸時代にかけて作り上げられた武家の軍隊の行列であり、軍隊の基本が大名行列にも転用されたものであるとした。

長柄隊の隊長の後ろには馬(鼻馬)が五疋描かれる。ここまですが前衛部隊、ここからが本陣の部隊である。大名行列を描いた絵巻には、鼻馬からはじまるものもある。多くの藩は城を出るときには鉄炮隊、弓隊、鎗隊を整えているが、最初の宿駅でそれを帰してしまい、その後は藩主を中心とした本陣の行列だけで進む。江戸に入るときには江戸屋敷の足軽隊が板橋や新宿まで迎えに出て、再び鉄炮隊ほかを整えていたと述べた。

・描かれない人々

江戸時代、蹄鉄が無かったので、蹄を痛めてしまわないように馬にも草鞋を履かせていた。この馬の草鞋は「沓」と呼ばれた。

馬が進むためには沓が必要であったが、先に述べた御鉄炮先手役の側に沓籠を持つ役は描かれていない。その理由について、この絵巻に描

かれるのは盛岡城を出立するときの行列で、藩の人間のみが描かれている。大名行列は、馬や人足を宿駅で雇い、荷物を持たせて進んでいくものであるから、御鉄炮先手役の沓籠は、途中で雇う人足に担がせていたのではないかと述べた。さらに、この絵巻に描かれたものが行列のすべてではないといえ、絵巻を見る際には、そういったことにも注意する必要があるとした。

・武威や格式を示すもの

鼻馬の後ろから、御陳長持や旗竿が続く、さらに挟箱、鎗、鉄炮、弓、笠や長柄傘が進む。これは大名の武家としての威力(武威)を示すものである。また、鷹匠や犬牽・獵犬も行列に加わった。これらは、幕府より鷹狩りを許されたことを象徴するものであり、自家の格式の高さを示すものであったとした。

対して、藩主が乗った駕籠の後ろには藩主の蓑、御葉弁当、御水弁当、御茶弁当、御茶道が進む。これは、駕籠の前とは対照的であり、藩主の日常、用いるものが並んでいると述べた。

・大名行列はなぜ長いのか

大名行列という、長いものと考えられている。その理由は藩主の家来達もそれぞれその家来を連れて行くためである。それは、家来の身分や格式を示し、さらに彼らの軍役をも示した。すなわち、行列の中に、いくつもの小さな行列を含んでいると言える。

藩主の後ろを進む側用人は、駕籠に乗り、弓や、刀を入れた刀筒をもたせ、馬を率いている。家老の行列には鉄炮五挺、挟箱、鎗等が加わった。南部藩ではないが、幕末に老中を務めた阿部正弘(一八一九〜五七)を出した備後福山藩(十万石)の史料には、藩主が老中になったときには、一万石の格式で東海道を上下することになっているとあった。このことから家老の行列は大名の行列を小規模にしたものであると説明した。

安永五年(一七七六)、オランダ商館員として江戸に来ていたスウェーデン人のツェンペリーは、將軍の日光社参を見聞した。彼は、將軍と藩主は全国民と同じ服装・髪型をしており、また、宝石類を身につけないので、他の者と区別ができない。しかし、旅や儀式の際には、身分や名声によって彼らの周りを相当数の人々を取り囲むのでわかるとしている。

武士は、階層が上がれば、それだけ従う家来が増える。大名行列の中にはそのようないくつもの行列が含まれる。このため、大名行列を分析すると、大名家臣団の形成過程もわかると述べた。

・行列の意味

武家の行列は、見せる行列であり、見られる行列でもあった。また参加する行列であり、動員する行列でもあった。人々は参加する中で自分の位置を確認した。一方で、武家のために諸階層が動員されるものがあり、それが武家政権である。行列

は、それを物語るものでもあった。やがて、多くの藩が各自の家臣ではなく、「渡御徒士」「渡り者」と呼ばれる非正規の者を雇用して、行列を構成するようになってくる。これにより、行列本来の意味が形骸化していく。それだけでなく、雇用了「渡り者」が、行列を乱したり、他の藩の行列の渡り者と喧嘩をしたりするようになり、それを藩の武士達が統制できなくなっていた。

その渡り者たちは、行列が通行する途中で、鎗や長柄を交代の者に投げ渡すようになっていく。現代の大名行列のイベントでは、この投げ渡しがアトラクションになっているが、これは大名行列を下から乗っ取り形骸化させていった渡り者がおこなっていたことであつた。さらに、幕府は最後まで、鎗を投げ渡すことを禁止していると述べた。

根岸氏は最後に、行列の構成要素を分析していくと武家社会の成立から解体まで見渡すことができるのではないかと結んだ。

(文責・大東敬明)

本年度の公開学術講演会の動画は令和三年二月一日より公開されています。左のQRコードを読み取り、アクセスしてください。また、詳細は『國學院大學研究開発推進機構紀要』一三三号(令和三年三月)に掲載されます。



日本文化研究所 宗敎文化オンラインワークショップ(インドネシア・タイ)

二〇二〇年は、新型コロナウイルスの感染拡大という未曾有の事態に見舞われ、大学における研究、教育も大きな影響を被ることとなった。大学の授業はほぼオンラインとなり、海外から人を招いての国際会議や、海外で開かれる国際学会も中止となった。学生のなかにも、海外への留学や旅行など、楽しみにしていた学びの機会を失った人は多かったと聞く。日本文化研究所では長く宗敎文化教育の方法や教材の開発に取り組んできたが、鎖国のような閉塞的な環境の中で、海外の宗敎文化について学ぶ必要性を、どのように伝え、どのように実践的に学ぶ機会を作るかが課題となっていた。

このような状況下で、これまでも大学における宗敎文化教育の必要性を認識し、日本文化研究所の研究会でも発表をしていたこと、またある株式会社TNCの代表取締役社長の小祝誉士夫氏が、コロナ禍におけるマーケティングの試みとして「オンライン家庭訪問」の仕組みを整えていると伺った。株式会社TNCは、主に食の分野に強い海外マーケティングの企業である。イスラム圏では、すでにインドネシアでオンライン家庭訪問のインフラが構築されているとのことであった。オンライン家庭訪問とは、株式会社TNC担当、コーディネーター、通訳(両者を兼ねる場合もあ

る)と、企業側担当者が現地の情報提供者とZoomでつながり、家の中を見せていただきながら、生活実態を知るとともに、インタビューを行うものである。スマホを持って、家の中を移動しながら、家電メーカーであれば、例えば洗濯機がどこにあり、誰が使用するのか、冷蔵庫の中にはどういったものが常備されているのか、といったことなどが話題となる。海外へ旅行に行っても、一般の家庭を訪問する機会はないため、地域文化を知るには、大変いい学びになるのではないかと考えた。そこで小祝氏に相談し、企業向けに開発されたこの新たなインフラを、大学の宗敎文化の学びに使用させてもらうことになった。そこで開催されたのが「宗敎文化オンラインワークショップ」である。宗敎文化教育推進センターとの共催の形で行われた。

七月に行われたインドネシアのワークショップが大変好評であり、また宗敎文化の学びとしてもきわめて有益であるとわかったため、後期にはタイをテーマにして実施された。いずれも大学生を中心に一〇〇名ほどの参加者があった。七月の「インドネシアのムスリムの暮らし」では、七月二日二〇時、株式会社TNCの副社長である木下朋氏に「インドネシアの今と生活者トレンド」と題して、海外マーケ

ティングという仕事の内容の紹介もしつつ、マーケティングの視点からインドネシアの状況を説明していただいた。次にインドネシアの宗敎を専門とする東北大学の木村敏明教授に宗敎の基礎的な情報を歴史背景なども含めて説明していただいた。Zoomにはチャット機能もあるため、参加者からはチャットで随時質問ができるようにした。想像以上にチャットでの質問が多く、関心の高さが印象的であった。

七月九日二〇時〜二一時半で「インドネシア・ムスリムの暮らし」と題するオンライン家庭訪問が行われた。ジャカルタ在住のティカさんという、夫と小さなお子さんと三人暮らしの若い働く女性のお宅を訪問させていただいた。写真にもあるように冷蔵庫の中まで見せてくれて、リアルなインドネシアの暮らしを知ることができた。

また、家の中で礼拝をする場所や



「インドネシア・ムスリムの暮らし」Zoomによるオンライン家庭訪問の様子

礼拝の時の服装なども、質問をする中で案内をし、紹介をしてくれた。参加者は特にコロナ禍がイスラムの暮らしにどのような影響を及ぼしているのかを知りたがっているようであった。

後期には、「タイの暮らしと宗敎文化」と題し、やはり座学とオンライン家庭訪問の二日間に亘って実施した。十一月三十日には、タイの宗敎、社会を専門とする櫻井義秀・北海道大学教授、本学研究開発推進機構客員教授が、タイの宗敎状況について説明をし、また株式会社TNCの木下氏が、タイのトレンドを紹介した。十二月一日のオンライン家庭訪問では、バンコクに暮らす二十代のパットさんという女性のお宅を訪問した。家庭の中におけるお手伝いさんの位置づけや食生活といった日常生活に関わることから、車を買ったときのお寺での祈禱やお守りのことなど、タイの宗敎文化に関わることもみせていただいた。第二回も、チャットを利用し、参加者の疑問に答えながら進められた。

参加者は、宗敎に関わることだけではなく、タイの若者に人気の日本のポップカルチャーのことや、どういったドラマが人気なのか、若者の暮らしそのものへの関心も高く、質問は広い分野にわたっていたが、どのような質問にも丁寧に対応していただけた。今回の企画は新たな産学連携の取り組みでもあり、今後の研究、教育の仕組み作りにも参考になるものであると考えている。

(文責・平藤喜久子)

日本文化研究所
国際研究フォーラム「見えざるものたちと日本人」
The Japanese and the Realm of the Unseen

令和二年一二月に、日本文化研究所主催の催事として二〇二〇年度国際研究フォーラム「見えざるものたちと日本人」を企画・開催したので報告する。二回のワークショップ(二月一日、二月一日)と講演会(二月一日)を合わせた一連の催事として行なった。ワークショップは、研究者・学生を主たる対象とした比較的小規模なものとして企画し、平日の夜に開催した。講演会については、一般からの申込を受け付け、多くの参加者を得た。

企画の趣旨は以下の通りとなる…

- ・ 神、幽霊、妖怪、鬼、などなど、日本人の周りには、さまざまな「見えざるもの」たちがいた。その「見えざるもの」たちの存在を信じ、信仰し、ときには交わり、使役したりするものも現れた。その交流の物語は人々の想像力を刺激し、あらたな信仰や物語、そして絵画が生み出されてきた。現在でも、ポップカルチャーの中で、鬼と戦う物語や地獄の世界、神々との交流を描く話が生み出され、人気を得ている。そして、その日本人が紡いできた見えざるものたちとの世界は、明治期以降、海外にも紹介されてきた。

「見えざるもの」を日本人は、どのように伝え、描き、信じてきたのか。そしてそのあり方は日本以外の地域で育った人にはどう見えるのだろうか。本国際研究フォーラムでは、宗教、文学、歴史、美術など、さまざまな観点から日本人と見えざるものたちとの関わりを問い直したい。次に各催事の概要を記す。

◆ワークショップ1「見えざるものをエガク」

日時：二〇二〇年二月一日(木) 一九時～二一時半

場所：Zoomによるオンライン開催

報告者・題目：遠藤美織(江戸東京博物館)「勸化本における地獄極楽と現世―『孝子善之丞感得伝』を中心に―」

渡邊晃(太田記念美術館)「浮世絵に描かれた〈みえざるもの〉」

司会：星野靖二(日本文化研究所)

本日のトピックス

- ①『孝子善之丞感得伝』とは
- ②『感得伝』の見えざるものたち
- ③『感得伝』のその後



要約

浮世絵における〈みえざるもの〉のイメージ・さまざまなソースを元に発見

- ①伝説的源流
鬼(目黒子、雲木童子など)、土蜘蛛、百鬼夜行
- ②歌舞伎・絵本からの図形的影響
黒髪、化粧、野郎、幽霊など
- ③〈みえざるもの〉とユーモア
・戦国武将と門下を中心とする。
・〈みえざるもの〉のイメージの多様化



参加者：最大三三名(画面上での最大参加者数。以下同様)。

◆ワークショップ2「見えざるものをカタル」

日時：二〇二〇年二月一日(水) 一九時～二一時半

場所：Zoomによるオンライン開催

報告者・題目：廣田龍平(東洋大学)「非人間の／による認識の存在論的造作」

・ドリユー・リチャードソン(カリフォルニア大学サンタクルズ校、國學院大學国際招聘研究員)「雪、妖怪、ゆるキャラ…北越雪譜と越後のアイデンティティについて」


司会：星野靖二(日本文化研究所)

参加者：最大三六名

非人間の／による認識の存在論的造作

廣田龍平

国際研究フォーラム「見えざるものたちと日本人」
 ワークショップ「見えざるものをカタル」
 2020年12月16日



おける不可視性と秘密性」

- ・ 小泉凡(小泉八雲記念館、島根県立大学短期大学部)「ラフカディオ・ハーンと〈見えざるもの〉の交渉をめぐる」
- ・ 斎藤英喜(佛教大学)「陰陽師からいざなぎ流へ―見えるものから〈見えない世界〉を探る技法―」

コメンテーター：飯倉義之(國學院大學)、藤澤茜(神奈川大学)

司会：平藤喜久子(日本文化研究所 所長)

参加者：最大一五三名

全体を通して、「見えざるもの」について、例えばそれがどのように描かれ、語られてきたのか、あるいはそもそも見える／見えないとはどういったことを意味するのか、またそれはどこまで「日本人」に特有のことなのか、といったことをめぐって充実した議論を行うことができ。今般のコロナ禍の状況に鑑みて、オンラインでの開催となったが、こうしたやり方が発表者・参加者にとって有益な面もあることがわかったので、今後の催事につなげていきたい。

(文責：星野靖二)

12月19日(土)
 14:00～17:30
 オンライン開催

国際研究フォーラム
見えざるものたちと日本人



国学院大学

研究開発推進センター 渋谷学シンポジウム

「地域資源を活かした都市防災へ―渋谷東地区と他地域から考える―」

本シンポジウムは國學院大學二十一世紀研究教育計画委員会研究事業「渋谷の都市形成と再開発に関する研究」の一環として実施した。当初は令和元年度事業として令和二年二月の開催を予定していたが、新型コロナウイルス感染症の影響により延期することとなり、令和二年十一月にオンライン上で開催するに至った。シンポジウムは二部構成からなり、第一部は、基調講演、個別報告及びコメントを録画した動画をそれぞれYouTube上に十一月十六日から二十八日にかけて限定公開で配信し、第二部はZoomを用いたライブ配信により十一月二十八日に開催した。以下にシンポジウムの内容を紹介する。

本シンポジウムの趣旨は、近年、地震や風水害などの大規模災害が全国的に頻発する中、地域社会の連携強化の必要性が高まっている現状を踏まえ、宗教施設などの地域資源を活かした都市防災のあり方について、渋谷東地区を中心としながら他地域との比較を試みることで議論を深めることにある。第一部では、稲場圭信氏(大阪大学大学院教授)の基調講演をはじめ、黒崎浩行氏(本学神道文化学部教授)、知久雅一氏、鈴木清志氏(ときわ松町会)、熊澤雄一郎氏(渋谷区危機管理対策部帰宅困難者対策担当課長)、佐野和子

氏(「震災時における地域社会の役割を考える会」事務局。なお同会は世田谷区代沢地区の防災を検討する地域活動団体(非営利組織)、矢島嗣久氏(北澤八幡神社宮司)の六氏が報告し、古沢広祐氏(本学研究開発推進機構客員教授)がコメント。第二部では、古沢氏の司会により、一般参加者を交えた総合討議を実施した。

基調講演

稲場氏は「都市防災に活かされる地域資源としての宗教」と題し、基調講演をおこなった。稲場氏は、災害時に「自助」「共助」「公助」という支え合いが社会的に要請されている中、宗教者・宗教施設と災害支援との関わりについて、東日本大震災の事例などを紹介しながら説明し、神社や寺院などの宗教施設に災害時の防災拠点となることが期待できると指摘。東京都内の宗教施設を対象として実施した災害時の受入体制に関する調査結果を紹介し、防災に関する行政との連携協定等を締結しているものの、災害時の協力意向を有する宗教施設数は約五割に上ることを示し、調査後には新たな協定締結も見られることを報告した。

また、宗教施設や学校、公民館などの指定避難所を地図上に落とし込

んだ「未来共生災害救援マップ」(www.respect-relief.net)を運営していることを紹介し、災害支援の一助とすべく、災害時には被災状況などを誰でも投稿できる仕組みにしたことを説明。宗教施設においては平常時から地域社会との連携を築いておくことが災害時にも効力を持つとし、例えば平常時に防災活動を実施することが高齢者や子供も含めた人と人との新たな縁づくり(ソーシャル・キャピタル)社会関係資本)の醸成にも繋がってゆくとの考えを述べた。

個別報告とコメント

黒崎氏は「多様性のあるまち渋谷のレジリエンスと宗教文化」と題して報告。渋谷区内の宗教施設や祭礼・行事が、地域の多様な人々の繋がりや創出と維持にどのような役割を果たしているのかについて、災害後のレジリエンス(人々の立ち直り・地域の復興)における宗教文化の役割も視野に入れながら検討した。宗教施設に関しては、耐震補修などいくつかの課題は残るが、渋谷駅周辺において災害発生時の帰宅困難者の受け入れ施設として指定されている点などを挙げ、宗教施設と行政・住民との連携の営みが確かに見出せると述べた。黒崎氏に関連して、知久氏・鈴木氏は「町会行事と地域防災」ときわ松町会(渋谷東地区)と題し、ときわ松町会(渋谷東地区)の取組みを報告。「七夕パレード」などの町会行事の中で防災訓練を実施することで地域住民の防災への意識啓蒙を図っていると話し、外国人家庭の参加など人々の新たな繋がりが

も生まれていることを紹介した。

熊澤氏は「渋谷区の帰宅困難者対策について」と題し、渋谷区で講じている災害対策について帰宅困難者対策を中心に報告。東日本大震災を契機に対策の見直しが進んでいることを説明し、震災時における渋谷駅周辺の混乱防止や人的被害の抑制を期して計画した安全対策について毎年度更新を加えていることや、帰宅困難者を想定した訓練の実施や案内図の設置にも取り組みながら、災害の発生に備えていることを述べた。

佐野氏は「世田谷区代沢の文化活動における多宗教連携と防災との関わり」と題して報告し、世田谷区代沢地区にある宗教法人等が連携して開催している代沢芸術祭が、地域住民の交流の場として機能していることなどを紹介。北澤八幡神社社殿をはじめとする宗教施設が、地域共同体の連携を強める地域資源としても活用されていると述べた。また「代沢芸術祭と地域に根差した防災活動」と題した矢島氏は、代沢中町会長として地域住民が交流を深められるように町会を運営していることを報告。令和二年に北澤八幡神社・代沢中町会・世田谷区の間で防災に関する協定を締結し、発災時の施設開放に備えていることも紹介した。

第二部の総合討議では、報告者が古沢氏のコメントに返答しながら議論を深めてゆき、参加者も交えて、神社の祭礼が地域共同体において果たす役割や、今後の地域における具体的な災害対策などについて、活発な議論がおこなわれた。

(文責・宮本誉士、半田竜介)

國學院大學博物館 企画展「モノで読む古事記」

開催趣旨

古事記の物語には、様々な器物(モノ)が登場する。古墳時代が終わり、律令国家の整備が進んだ七、八世紀という変革期に編まれた古事記は、ありのままの「歴史」を伝えていくわけではないが、古事記に語られたモノには、古墳時代の考古資料との関わりを推測できる例が確認できる。

本企画展では、具体的なモノを手がかりに、古事記の物語を読み解くことを目的として開催された。なお、本企画展は、古事記学センターの研究成果公開であり、同センターによる古事記研究データベースの構築と連携している。そのため、同センターにて展示の企画・立案を行った。

会期

本企画展は新型コロナウイルス感染症の流行により、開催計画・会期を大幅に変更して実施された。当初は、令和二年五月十六日から六月二十八日までの開催を予定していた。しかし、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言が出され、博物館も四月八日より臨時休館となったため、緊急事態宣言解除後に、大学キャンパスの入構制限が緩和され、博物館が再開されるまで延期となった。

延期となっていた本企画展は、令和二年七月十六日(木)～九月二十六日(土)を会期とすることが決定し、開幕した。

本企画展は、常設展と同様に新型コロナウイルス感染症対策として、

週三日(木・土) 十二時～十六時の短縮開館での開催であった。八月末には、会期を十月三十一日(土)まで延長することが決定し、計四十二日間の開催となった。会期中の来館者数は二二八一名(一日平均五四・三二名)であった。

展示構成

本企画展は、古事記に登

場するモノと作品との対比のために、次のような構成のもと展示を行った。

第1章 太安萬侶と古事記の編纂

第2章 国土の誕生

1 国生み

2 黄泉国訪問

3 みそぎ

第3章 高天原から出雲へ

4 天の石屋

5 八咫のおろち

第4章 大国主神の国譲り

6 根の堅州国訪問

7 大国主神の国作り

8 天若日子の派遣

9 国譲り

第5章 天つ神御子から天皇へ

10 海佐知毘古と山佐知毘古

11 神武東征

また、展示物は本学所蔵品を中心としつつ、木更津市教育委員会、同市郷土博物館金のすず、北澤八幡神社から展示品を借用した。このほか、パネルの作成にあたっては外部機関の協力を得ることができた。

展示内容の詳細については、刊行のリーフレット(全二十一頁)を御覧いただきたい。なお、リーフレットやパネルについての英訳も古事記学センターにて担当した。

オンラインでの取り組み

本企画展は新型コロナウイルス感染症の影響下での開催となるため、オンラインミュージアムでの同時開催を前提に開幕された(博物館によるオンラインミュージアムに

ついては八頁を参照)。

そのため、本企画展のチラシ等にもオンラインミュージアムの同時開催について案内を掲載すべく準備が進められた。開幕までに、展示の予告動画を配信し、開幕日に合わせオンラインミュージアム第一章を公開した。その後は順次、全五章の動画をYouTubeによって配信した。

「予告編」企画展「モノで読む古事記」(六月十八日配信)

「第一章」太安萬侶と古事記の編纂(七月十六日配信)

「第二章」国土の誕生(七月十六日配信)

「第三章」高天原から出雲へ(七月二十四日配信)

「第四章」大国主神の国譲り(七月三十一日配信)

「第五章」天つ神御子から天皇へ(八月七日配信)

加えて博物館で行う予定だったミュージアムトークもオンラインにて配信を行った。

第一回「古事記を読んでモノを知る」渡邊卓(八月二十九日配信)

第二回「この展示で言っておきたい2つのコト」深澤太郎(九月五日配信)

第三回「古事記と鉄」笹生衛(九月十二日配信)

前例にない状況下での開催となったが、これらの活動が功を奏してか、各種機関の取材もあり、広く研究成果を公開する企画展となった。

(文責・渡邊 卓)



國學院大學博物館

企画展「楽石雜筆—神道考古学の祖 大場磐雄の記憶と記録—」

はじめに

國學院大學博物館では、神道考古学の祖である大場磐雄が遺した様々な資料を研究対象とし、館蔵資料の再評価などに活用してきたが、これに加えて、大場の愛弟子であり、茂木雅博氏(茨城大学名誉教授)より、『楽石雜筆』と関連する野帳などを御寄贈頂いた。この『楽石雜筆』は、大場が大正七年(一九一八)から書き綴っていた日記であり、学史的な記録として極めて貴重なもの。本展覧会は、この機会に「大場学」を回顧し、資料の保存と、今日的な活用を図ろうとするものである。

第1章 大場磐雄と楽石雜筆

—書き継がれた学史的記録—

明治三十二年(一八九九)に東京市麻布区で生まれた大場磐雄は、神道考古学という独自の研究分野を切り拓いた。このような大場の学風は、頻繁に行われた野外調査の経験と、体系的に収集・整理・保管してきた学術情報に基づいている。とりわけ、大場が自ら『楽石雜筆』と名付けた備忘録は、いわば考古日録、研究余話たるものであり、追って発表された報告・論文等の基盤となったデータが克明に記されている。そこに刻まれた大場の証言は、彼の残

した仕事を今日的な視点から再検証する上でも極めて貴重なものと言えよう。

第2章 三人の師

—考古学・民俗学・神道史学—

大場の学問が幅広いものとなったのは、学に志した初期の段階で出会った師らによる影響が少なくない。その師とは、アジアを股にかけて考古学者・人類学者の鳥居龍藏、独自の芸能史研究を拓いた民俗学者の折口信夫、そして実証的な神道史研究で知られる歴史学者の宮地直一である。彼らの薫陶を受けた大場は、折口に学んだ民俗学から研究者としてのキャリアを踏み出すとともに、鳥居が創設した上代文化研究会の中心人物として考古学的調査に従事し、宮地から緻密な文献資料の取り扱いを受け継いだ。

第3章 先史時代から歴史時代まで

—研究の足跡—

大正十一年(一九二二)に大学を卒業した大場は、第二横浜中学校にて教鞭を執る傍ら、民俗学・考古学の研究者として歩み始めた。いわば「大場学」とでも称すべき幅広い業績は、その基礎となった先史考古学研究や、静岡県洗田遺跡の調査を切

掛けとする神道考古学研究、多量の木製品が出土した千葉県菅生遺跡の発掘にはじまる古代集落研究、そして茨城県鏡塚古墳などの古墳研究を中核とする。また、古典や史料に関する該博な知識に基づいた歴史考古学研究や、考古学的な痕跡と古氏族との関係について取り組んだほか、復元建物を伴う史跡整備にも先鞭をつけた。

第4章 趣味の人として

—古美術教室と小唄の師匠—

研究の対象が広範に亘った大場は、プライベートでも幅が広い人物であった。折口信夫の高弟らしく和歌を嗜み、書画に長け、カッポレや小唄・長唄まで趣味の範囲とし、東横劇場などで友人はだしの芸を披露していたという。國學院大學の課外活動においては、落語研究会の指

導に当たり、各地の文化財について見聞する古美術教室も主催。公私に亘って、その人生を謳歌した様子が伝えられている。

おわりに

民俗学に傾倒し、先史考古学研究からはじまった大場の歩みは、神道考古学というユニークな分野の創出に至り、國學院大學の代表的な学統を形成した。自然宗教である神道を考古学的に取り扱うには、乗り越えねばならぬ課題が少なくないが、比較宗教考古学としての祭祀考古学が唱えられ、古代神祇祭祀の枠組みをベースにして神道のはじまりを明らかにしようとする方法論も採用されるなど、大場没後も斯学の発達は止まるところがない。

(文責・内川隆志、深澤太郎)



寄贈された『楽石雜筆』

國學院大學博物館

オンラインミュージアム

國學院大學博物館は、本年度新たな取り組みとして、オンラインミュージアムを開設した。本取り組みは、当館の展示や研究成果を動画アーカイブとして、保存・活用し、国内外を問わず広く公開することを目的とする。また新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、外出が制限されるなか、自宅に居ながら、博物館の展示やイベントを楽しむことができるツールとしての役割も果たす。

1、概要

國學院大學博物館のオンラインミュージアムは大きく分けて、常設展と企画展の2つの種類に分かれる。常設展の動画は、教員が展示室を實際に解説していく形をとり、企画展の動画は資料を中心にナレーションで展開し、歴史番組風に進んでいくものとした。また、それぞれの企画展のミュージアムトークも動画として配信した。これにより、博物館に實際に足を運べない方にも、展示内容、資料、解説を遠隔で提供することができる。これらの動画配信は、全て國學院大學博物館YouTubeチャンネルを利用した。

2、常設展動画

常設展は、考古・神道・校史の3つのエリアをそれぞれ担当教員が

展示室で解説している様子を撮影。動画は、視聴のハードルが下がるよう、全て5〜6分程度で構成した。解説に補足する説明や理解を助けるキーワードを効果的に展開し、「分かりやすい」「飽きない」動画を目指した。いずれのエリアもパート1からパート3の各3回の構成とし、2020年6月の考古パート1から12月の校史パート3の公開まで、半年で全9本を公開した。左記に、その内容と公開日、担当教員を示す。

▼考古

Part1「先史時代の造形―縄文・弥生―」[2020/6/15] 深澤太郎准教授
Part2「国家形成と神道―古墳・古代―」[2020/6/15] 深澤太郎准教授
Part3「日本宗教の原型―古代・中世―」[2020/6/15] 深澤太郎准教授

▼神道

Part1「神祭りの原像」[2020/7/3] 笹生衛館長・教授
Part2「神々の姿」[2020/8/3] 大東敬明准教授
Part3「神々への捧げ物」[2020/9/1] 吉永博彰助教

▼校史

Part1「国学とはなにか」[2020/10/3] 渡邊卓准教授
Part2「國學院大學の建学の精神」

[2020/11/4] 高野裕基助教
Part3「有栖川宮家・高松宮家ゆかりの品々」[2020/12/23] 渡邊卓准教授

2つのコト」深澤太郎准教授
[2020/9/5]
第3回「古事記と鉄」笹生衛館長・教授 [2020/9/12]

2、企画展動画

企画展の動画制作は、常設展の動画制作と並行して始動した。5月の開催予定で7月に開幕が延期となった企画展「モノで読む古事記」が最初の動画制作となった。実際の章展開に合わせて、5本立てとし、各8〜9分のものとした。古事記の読み上げや、『古事記絵伝』（古事記学センター蔵）を効果的に使用し、考古資料との組み合わせで図録の内容が動画で楽しめる構成とした。開幕後は、ミュージアムトーク3回分を収録配信。その後が続く、企画展「楽石雑筆」、企画展「江戸のベストセラ―唐詩選」も同じく動画を制作、公開した。左記にその内容と公開日を示す。

▼企画展「モノで読む古事記」

「予告編」企画展「モノで読む古事記」[2020/6/18]
「第1章」太安萬侶と古事記の編纂 [2020/7/16]
「第2章」国土の誕生 [2020/7/16]
「第3章」高天原から出雲へ [2020/7/24]
「第4章」大國主神の国譲り [2020/7/31]
「第5章」天つ神御子から天皇へ [2020/8/7]
ミュージアムトーク

▼企画展「楽石雑筆」

「本編」企画展「楽石雑筆」 [2020/12/1]
ミュージアムトーク
第1回「愛弟子が語る大場磐雄Ver.1」
相山林繼本学名誉教授 [2020/11/28]
第2回「愛弟子が語る大場磐雄Ver.2」茂木雅博茨城大学名誉教授 [2020/12/5]
▼企画展「江戸のベストセラ―唐詩選」
ミュージアムトーク
第1回「江戸のベストセラ―唐詩選」赤井益久教授 [2021/1/30]
第2回「唐詩選Q&A」赤井益久教授 [2021/2/13]

6月に開設したオンラインミュージアムは、YouTubeのチャンネル登録者数が26人から1000人（令和3年1月末現在）となり、再生回数是最も多いもので、4000回を超えている。

本取り組みは、現在英語化が進められており、今後の企画展も引き続き、動画公開を進めていきたい。（文責・國學院大學博物館）



第1回「古事記を読んでモノを知る」渡邊卓准教授 [2020/8/29]
第2回「この展示で言っておきたい

令和二年度 國學院大學博物館活動報告

一、活動報告

令和二年度は、新型コロナウイルス(COVID-19)の感染拡大に伴う緊急事態宣言対応により長期間の臨時休館を余儀なくされた。宣言解除後は、公益財団法人日本博物館協会をはじめとする関連のガイドラインを踏まえ、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から必要な対策を講じ、七月二日より短縮開館の形で再開した。

完全に終息し正常化するまでに長期的な対策が必要とされていることから、当館の事業においても本年度の計画を一部変更して実施した。博物館の展示公開として、企画展四回、特集展示を一回開催し、当初計画していた企画展「What SHINTO is... ー日本の神と祭りー」・特別展「『日本書紀』撰録1300年ー神と人とをむすぶ書物ー」は、令和三年度以降に延期となった。また休館中の展示観覧に代わる取り組みとして、「おうちミュージアム」に参加し、SNS上で楽しめる内容を発信。さらに、当館の常設展及び企画展をネット上で観覧できる「オンラインミュージアム」を開設。実際の展示と連動した展示解説やミュージアムトークの動画を制作・配信し、展示公開と教育普及を合わせて行った。

なお、オンラインミュージアムはアーカイブとしての役割もあり、コロナ終息後においても継続的に取り組む事業に発展させていく(詳細

表1 令和二年度 展示内容と関連事業

展示(会期)	関連事業		
企画展	モノで読む古事記 (R2.7/16~10/31)	ミュージアム(オンライン)	8/29 渡邊卓(本学准教授)「古事記を読んでモノを知りたい」・9/5 深澤太郎(本学准教授)「この展示で言っておくべきもの」①「神代」②古墳時代の葬送と神話、9/12 笹生衛(当館館長・本学教授)「古事記と鉄」
	楽石雑筆ー神道考古学の祖 大場磐雄の記憶と記録ー (R2.11/5~12/26)	ミュージアム(オンライン)	11/28 梶山林繼(本学名誉教授)「愛弟子が語る大場磐雄」・12/5 茂木博(茨城大学名誉教授・当館客員教授)「愛弟子が語る大場磐雄」
	江戸のベストセラー 唐詩選 (R3.1/13~2/27)	ミュージアム(オンライン)	1/30 赤井益久(本学教授)「江戸のベストセラー唐詩選」・2/13 赤井益久「唐詩選Q&A」
	縄文早期の居家以人骨と岩陰遺跡ー居家以プロジェクトの研究結果ー (R3.3/4~5/8)	ミュージアム(オンライン)	3/20 谷口康浩(本学教授)「居家以人骨と岩陰遺跡」(予定)
特集展示	古事記アートコンテスト 受賞作品展 (R3.2/24~4/24)		
オンライン展示	オンラインミュージアム [YouTube] (R2.5/22~)		
	おうちミュージアム [SNS] (R2.4/16~)		

は8ページを参照)。その他、昨年度までに実施してきた博物館の基盤強化のための施策(展示の再構成、多言語化、ミュージアムショップの運営、環境整備)を継続・推進した。

二、展示公開(表1)

【企画展・特集展示】

- 企画展「モノで読む古事記」(展示図録刊行)、会期:令和二年七月十六日~十月三十一日。主催:当館。
- 企画展「楽石雑筆ー神道考古学の祖 大場磐雄の記憶と記録ー」(展示図録刊行)、会期:令和二年十一月

五日~十二月二十六日。主催:当館。

- 企画展「江戸のベストセラー唐詩選」(展示図録刊行)、会期:令和三年一月十三日~二月二十七日。主催:当館。
- 企画展「縄文早期の居家以人骨と岩陰遺跡ー居家以プロジェクトの研究結果ー」(展示図録刊行)、会期:令和三年三月四日~五月八日。主催:國學院大學考古学研究室、当館。(特集展示、オンライン展示については表1を参照)

三、教育普及

教育普及事業では、展示公開に関連するミュージアムトークをオンライン配信の形式で実施した(詳細は表1を参照)。

四、環境整備・営繕

関連のガイドラインを踏まえ、新型コロナウイルス感染拡大防止の各種対策を行い、コロナ禍において

表2 令和二年度入館者数

月	(名)
4月	102
5月	0
6月	0
7月	401
8月	341
9月	661
10月	967
11月	683
12月	642
1月	297
合計	4,094

令和3年1月末日現在

も博物館機能を継続的に運営できるように館内環境を整備した。また、指定文化財の展示対応のための施策として、展示ケース及び照明器具を購入し、展示環境の充実化を図った。さらに、展示空間の空気質・湿度を良好なレベルに維持させるための施策やIPM(総合的有害生物管理)を実施し、資料保護・管理運営の質的向上に取り組んだ。

五、運営支援

ミュージアムショップの郵送販売は、これまで図録・書籍のみの販売であったが、新たにグッズの郵送販売も開始した。また、コロナ禍において従来のような博物館への集客が見込めないことから、博物館の活動の場をオンラインに広げ、ウェブサイト、SNS、外部サイトでの情報発信、動画配信を積極的に行った。本年度の入館者数は、令和三年一月末日現在、四千九十四人となっている。未だ終息が見えないコロナ禍ではあるが、実際の展示とオンラインの双方で工夫を凝らしながら、本学の研究および学術資料の公開・活用を推進する博物館運営を目指していく。

(文責: 國學院大學博物館)

彙報

会議

○全体

- ・令和二年度第一回運営委員会、令和二年六月十一日(木)、オンライン会議
- ・令和二年度臨時運営委員会、令和二年九月二十四日(木)、オンライン会議
- ・令和二年度第二回運営委員会、令和二年九月二十四日(木)、オンライン会議
- ・令和二年度第三回運営委員会、令和二年十月八日(木)、オンライン会議
- ・令和二年度第四回運営委員会、令和二年十一月十二日(木) 若木タワエ地下一階会議室○二
- ・令和二年度第五回運営委員会、令和三年一月十四日(木)、オンライン会議
- ・令和二年度第一回企画委員会、令和二年五月十三日(水)、メール審議
- ・令和二年度第二回企画委員会、令和二年七月八日(水)、メール審議
- ・令和二年度第三回企画委員会、令和二年九月十六日(水)、若木タワエ地下一階会議室○二
- ・令和二年度第四回企画委員会、令和二年十一月十一日(水)、メール審議
- ・令和二年度第五回企画委員会、令和三年一月十三日(水)、メール審議
- ・令和二年度第一回人事委員会、令和二年六月十日(水)、AMC棟五階会議室○六
- ・令和二年度第二回人事委員会、令和二年九月十六日(水)、若木タワエ地下一階会議室○二
- ・令和二年度第三回人事委員会、令和二年十月三日(土)、持ち回り稟議
- ・令和二年度第四回人事委員会、令和二年十一月十一日(水)、AMC棟五階会議室○六
- ・令和二年度第五回人事委員会、令和三年一月十三日(水)、オンライン会議
- ・令和二年度第一回教員等資格審査委員会、令和二年六月十日(水)、AMC棟五階会議室○六
- ・令和二年度第二回教員等資格審査委員会、令和二年十一月十一日(水)、AMC棟五階会議室○六

○日本文化研究所

- ・令和二年度第一回所員会議、令和二年七月十五日(水)、オンライン会議
- ・令和二年度第二回所員会議、令和二年九月一日(火)、オンライン会議
- ・令和二年度第三回所員会議、令和二年十月二十八日(水)、オンライン会議
- ・令和二年度第四回所員会議、令和二年十二月二十三日(水)、メール審議

○学術資料センター

- ・令和二年度第一回学術資料センター会議、令和二年九月四日(金)、メール審議
- ・令和二年度第二回学術資料センター会議、令和二年十二月十六日(水)、AMC棟五階会議室○六

○校史・学術資産研究センター

- ・令和二年度第一回校史・学術資産研究センター会議、令和二年九月四日(金)、メール審議
- ・令和二年度第二回校史・学術資産研究センター会議、令和二年十二月十五日(火)、オンライン会議

○研究開発推進センター

- ・令和二年度第一回研究開発推進センター会議、令和二年九月十日(木)、メール審議
- ・令和二年度第二回研究開発推進センター会議、令和二年十二月二十三日(水)、オンライン会議

○國學院大學博物館

- ・令和二年度第二回國學院大學博物館会議、令和二年九月四日(金)、持ち回り稟議
- ・令和二年度第三回國學院大學博物館会議、令和二年十二月十六日(水)、AMC棟五階会議室○六

○古事記学センター

- ・令和二年度第一回古事記学研究実施委員会、令和二年六月三日

- ・(水)、メール審議
- ・令和二年度第二回古事記学研究実施委員会、令和二年九月二十五日(金)、メール審議

公開講座・講演会・シンポジウム・関連学会

○全体

- ・令和二年度公開学術講演会「参勤交代行列の構造」、令和三年二月一日(月)、オンライン配信、講師||根岸茂夫(本学教授)
- 日本文化研究所
 - ・宗教文化オンラインワークショップ「インドネシアのムスリムの暮らし」第一回||令和二年七月二日(木)二十時~二十一時三十分、第二回||令和二年七月九日(木)二十時~二十一時三十分、講師||株式会社TNC、木村敏明(東北大学教授)、司会||平藤喜久子(本学教授)
 - ・オンラインワークショップ「タイの暮らしと宗教文化」第一回||令和二年十一月三十日(月)十九時~二十一時、第二回||十二月一日(火)十九時~二十一時、講師||櫻井義秀(北海道大学教授)、株式会社TNC、司会||平藤喜久子(本学教授)
- ・国際研究フォーラム関連ワークショップ「見えるもの」をエガク」令和二年十二月十日(木)十九時三十分~二十一時三十分、オンライン開催、報告者||遠

藤美織(江戸東京博物館)、渡邊晃(太田記念美術館)

・国際研究フォーラム関連ワークショップ2「見えざるものをカタル」令和二年十二月十六日(水)、十九時三十分～二十一時三十分、オンライン開催、報告者＝廣田龍平(東洋大学)、ドリユー・リチャードソン(カリフォルニア大学サンタクルズ校、國學院大學国際招聘研究員)

・国際研究フォーラム「見えざるものたちと日本人(The Japanese and the Realm of the Unseen)」令和二年十二月十九日(土) 十四時～十七時三十分、オンライン開催、講師＝小泉凡(小泉八雲記念館館長、島根県立大学短期大学部名誉教授)、斎藤英喜(佛教大学教授)、アンドレア・カステイリヨニ(名古屋市立大学講師)、コメントーター＝飯倉義之(本学准教授)、藤澤茜(神奈川大学准教授)、司会＝平藤喜久子(本学教授)

○研究開発推進センター

・令和二年度オンライン渋谷学シンポジウム「地域資源を活かした都市防災へ～渋谷東地区と他地域から考える～」第一部＝令和二年十一月十六日(月)～十一月二十八日(土)、録画配信、第二部＝令和二年十一月二十八日(土) 十四時～十五時三十分、ライブ配信、講師＝稲場圭信(大阪大学大学院教授)、報告者＝黒崎浩行(本学教授)、知久雅一・鈴

木清志(ときわ松町会)、熊澤雄一郎(渋谷区危機管理対策部帰宅困難者対策担当課長)、佐野和子(「震災時における地域社会の役割を考える会」事務局)、矢島嗣久(北澤八幡神社宮司)、コメント＝古沢広祐(本学客員教授)

・令和二年度共存学公開研究会「東日本大震災被災地の復興活動10年を振り返る～震災復興と伝統文化、福島10年の総括と今後～」令和三年二月六日(土) 十四時～十七時四十五分、オンライン開催、報告者＝平本謙一郎(公財)福島イノベーション・コースト構想推進機構企画事業部事業課東日本大震災・原子力災害伝承館アテンド(元)、懸田弘訓(元民俗芸能学会福島調査団団長)、上西律子(NPO民俗芸能を継承するふくしまの会会員)、山名隆弘(福島県いわき市・大國魂神社宮司)、コメント＝茂木栄(本学教授)、黒崎浩行(本学教授)、司会・進行＝古沢広祐(本学客員教授)

出張

○学術資料センター

・内川隆志・深澤太郎・吉永博彰、「三宅島における信仰史の考古・民俗学的調査」のため、令和二年八月二十一日(金)～八月二十四日(月)、東京都三宅村

・内川隆志、「館蔵国分寺瓦等の関連資料等の所在調査」のため、令和二年十月三十日(金)～十月

三十一日(土)、新潟県佐渡市

○古事記学センター

・渡邊卓、「近世国学における上代散文(『古事記』『日本書紀』『風土記』)研究の調査」のため、令和二年十一月二十三日(月)～十一月二十四日(火)、京都府京都市

・渡邊卓、「近世国学における上代散文(『古事記』『日本書紀』『風土記』)研究の調査(継続)」のため、令和二年十二月十三日(日)～十二月十四日(月)、京都府京都市

刊行物

○全体

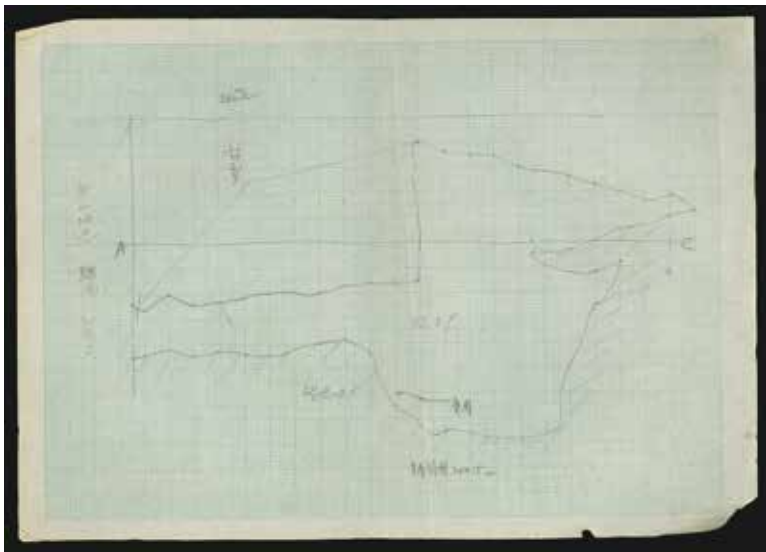
・研究開発推進機構「機構ニュース」通号二十七(令和二年六月二十五日発行)

資料紹介
茨城県鏡塚(日下ヶ塚)古墳出土品と大場磐雄資料



上：茨城県鏡塚古墳出土品

右下、左下：大場磐雄資料に残された鏡塚古墳の記録



茨城県大洗町鏡塚(日下ヶ塚)古墳は、鹿島灘を望む大洗台地に営まれた古墳時代前期後半の前方後円墳である。昭和二十四年(一九四九)に、國學院大學の大場磐雄を団長とする鏡塚古墳調査団が発掘した後円部頂の粘土槨からは、鉄製模造品、堅櫛、直刀、石製模造品、鏡、そして被葬者の装身具などが出土した。平成二十二・二十四年(二〇一〇・二〇一二)の大洗町教育委員会による調査では、全長が約一〇三・五mと判明し、方形の透孔をもつ円筒埴輪や、長胴壺形埴輪が伴う事実も明らかとなった。

大場らによる調査成果は、昭和三十一年(一九五六)に『常陸鏡塚』として刊行されたが、その再検証を可能にする情報源として、調査時の原図・写真・野帳や、『楽石雑筆』の記述などがある。これらは、大場が遺した膨大なアーカイブ「大場磐雄」資料の一部であり、國學院大學博物館において再整理と研究を進めてきた。なお、『楽石雑筆』とは、大場が大正七年(一九一八)から書き綴っていた日記であり、長らく保管してきた茂木雅博氏(茨城大学名誉教授)より御寄贈頂いたものである。

実際、野帳巻二十五には、磯浜古墳群を形成する諸古墳の知られざる旧観が記録されていた。また、原図には、粘土槨の粘土層にレンズ状の朱層が挟まれていたという記述が見出され、埋葬施設の構築過程にも再検討の余地があることが明らかとなった。これは、博物館の収蔵資料と、関連アーカイブを総合的に検証することで、資料価値が一層高まった例の一つである。

(文責・深澤太郎)